

ドミートリー・オルロフ著『崩壊 5 段階説 : 生き残る者の知恵』について

大谷正幸 (金沢美術工芸大学)

・原著者 ドミートリー・オルロフ (Dmitry Orlov, Дмитрий Орлов)

1962 年旧レニングラード生まれ。旧ソビエト時代の学者家系 (父はショスタコービッチを研究する音楽学の、祖父はトルストイとプーシキンを研究するロシア文学の教授) に生まれ育ち、12 歳でアメリカに移住、応用言語学の修士号を持つエンジニアとして、高エネルギー物理学、電子商取引、インターネットセキュリティを含む、様々な分野で働いた経験がある。

先に崩壊した超大国ソビエトと残った超大国アメリカの特徴を比較分析してアメリカ合衆国に予期される崩壊を論じた”Post-Soviet Lessons for a Post-American Century” (2005 年, 邦訳「アメリカの世紀後のためのソビエト後の教訓」http://www.shiftm.jp/show_blog_item/164) およびプレゼンテーション”Closing the 'Collapse Gap': the USSR was better prepared for collapse than the US”(2006 年, 邦訳「『崩壊時の相違』を見極める : ソ連はアメリカよりも崩壊の備えに長けていた」http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/~momo/orlov/closing_collapse_gap.htm) でピークオイル論者として頭角を現した。

彼のブログ ClubOrlov に記されたエッセイは、未来学の資料としても取り上げられ、しばしば各国語に翻訳されて再配信される。最近では時折、ニュース専門局 RT の番組 Keiser Report のゲストとして時勢に関する意見を求められている。

著書に 2009 年 IPPY アワードを受賞した”*Reinventing Collapse: The Soviet Example and American Prospect*”(2008 年、改訂版 2011 年) などがあり、機能的非識字の社会問題緩和に向けた英語教材 Unspeller(2014)の開発も手掛けている。

・崩壊の証拠立て

- ① 工業文明を維持するために必要な資源の多くがすでに生産量においてピークを過ぎてしまった、あるいはやがてピークに達する。
- ② 「成長の限界」モデルのような数理モデルの示唆→ 成長を前提としたシステムの不具合
- ③ 実感 : 「人々は、未来が過去とは似ていないだろうということを認識しはじめている。大学の学位が経歴というほどのものではなく、好条件の終身雇用を導いてくれないと若い人々は気付きはじめている。老いた人々は、年金だけでは暮らしていけないだろうと考え、長期にわたる失業者は早々と人生が終わっていると考えはじめている」(訳書 p.22)

- ・「崩壊 5 段階」の定義（訳書 p.32～）、および著作中取り上げられる各段階の事例研究

「現状において信頼していることが特異的なレベルで失墜する段階に応じて、崩壊の五段階をそれぞれ関連づけたものとなっている」

第 1 段階——金融の崩壊

「平常通りのビジネス」という信頼が失われる。未来はもはや、リスク評価や保証付きの金融資産を可能にした過去とは違うものだと考えられるようになる。金融機関が破産する。預金が一掃され、資本調達が損なわれる。

事例研究：アイスランド経済の破綻と再生

第 2 段階——商業の崩壊

「市場が供給してくれる」という信頼が失われ、通貨が減価するか希少なものとなる。あるいは、そのどちらもが起こる。商品価格が高騰し、輸入および小売りチェーンが支障をきたす。そして、生存するうえにおける必需品が広範囲で不足する事態が常態となる。

事例研究：ソ連崩壊後のロシアマフィアの跋扈から「法の独裁」に至るまで

第 3 段階——政治の崩壊

「政府があなたの面倒をみってくれる」という信頼が失われる。市販されている生活必需品が入手困難となり、それを緩和する公的措置が奏功しなくなるにつれて、政界の支配層は正当性と存在意義を失うことになる。

事例研究：帝国の支配を免れてきたパシュトゥーン人

第 4 段階——社会の崩壊

権力の空白を埋めるために現れるのが、慈善団体だろうと他の集団だろうと、地方の社会制度は資源を使い尽くすか内部抗争の果てに機能しなくなり、「周りの人々があなたを気遣ってくれる」という信頼が失われる。

事例研究：無秩序で組織化に乏しい社会でうまく暮らし得るロマ

第5段階——文化の崩壊

人間の善良さへの信頼が損なわれる。人々は、「親切さ、寛大さ、思いやり、情愛、正直さ、もてなしのよさ、同情心、慈悲」（『ブリンジ・ヌガグ』）といった能力を失う。家族はバラバラになって、希少な資源をめぐる骨肉の争いとなる。新しいモットーは、「お前は今日死ね、俺は明日だ」（『収容所群島』）というものになる。

事例研究：「人間的な感情など問題にならない単なる生存システム」を築いたイク族

・ Excerpts

「崩壊の初めの三つの段階（つまり、金融、商業、政治）について考察するならば、金融の崩壊が初めに起こることになるはずだという理由は明白である。それに、それはある程度すではじまっている。そして、商業の崩壊は製品やサービスの物理的な流れの攪乱から生じ、その結果、政府がもはや市民に対する責務を果たせなくなると、続いて政治の崩壊が起こることになる」（訳書 p.38）

「第1段階と第2段階の崩壊を食い止めようとする試みは、おそらくエネルギーの無駄に終わるだろう。しかし、第3段階、そしてなんとしてでも第4段階を食い止めることに毅然として取り組むことは万人の利益となる。最後の第5段階を避けることは、単純な死活問題にすぎない」（訳書 p.35）

「政治の崩壊が起きると、人々はひどい目に遭うこととなる。・・・国家を戦時体制に置くならば、政府はさまざまな物資を徴発して、それらを支配階級の利益にあてることを可能にする。さらに、さまざまな運動や活動を制限することもできれば、面倒な若者を駆り集めて戦闘に送り出すことで不平分子を監禁することも可能となる。

金融および商業の崩壊は、もっともひどい専制政治に傾倒する人々にとっては好機なのだ。ひとたび専制が確立すると、気付けば混乱に陥って分別を失った弱い人々は、専制に反対して立ち上がることがほとんどできなくなる。そして、新しい専制は権利を侵害しながら恒久的なものになり、延々と続くことになる。

その間、その国はボロボロになって、共倒れとなる抗争や継承にまつわる争いを通して、あるいは外国の支配に屈服してますます弱体化することを通して、崩壊に向かうことになる。金融および商業の崩壊に対する応答として派生していくことには、専制政治から無秩序までと幅がある。全面的な武力衝突の他にも多くの小競り合いや行き詰まり状態も想定されるが、ヒエラルキーのない自治的な社会的協力というスイートスポットもある。」（訳書 p.260）